

平城宮才12・13次発掘調査概報

奈良国立文化財研究所

平城宮跡12・13次発掘調査概報

特別史跡「平城宮跡」の12次調査は、今年度当初から、現園有地の北端にある発掘調査事務所の前の方、約20アール（6A A B - B・D・F地区）で行い、ひきつうき13次調査を、通称一糸通りの方約60アール（6A A B・u, 5A A C-c・D・F・H・L・K・V地区）で行なった。以下その結果を略述する。

(1) 12次調査

この発掘は、12次以内襲撃築部にあたり、検出した主な遺構は、建物2棟、回廊2画、橋2列であつて、これらが少量にとり多量に散らつて遺留されている。

12次調査以来の遺構としては、調査地敷頭部に東西方向の掘立柱網（柱間各3間）がある。この網は掘立柱回廊（S25247）と重複しており、回廊よりも古い前期のものである。この網の東・西限は不明であるが、今回の調査では、4間分を検出した。12次以内襲撃の遺構としては、築地回廊1、掘立柱回廊1、建物1がある。調査地南端で検出した東西方向の凝灰岩雨落溝は、内襲内部を流す前園築地回廊の北辺前溝である。前回検出した内襲正殿の東南建物（SB440）の南3間をへたて、南北にたがらば幅×2間の南北棟（柱間各3間）は、正殿の東南建物や、掘立柱回廊と、それとれ柱通りがせう。この東にある南北方向の掘立柱回廊（SC247）（柱間各3間）は、前園築地回廊に接続し、内襲内部前面中庭部を閉鎖している。今回は間分を検出し、これで掘立柱回廊は南北22間の全規模を知ることができた。この回廊の東西の雨落溝は糸通りのものであるが、築地回廊北雨落溝との接合部分にのみ凝灰岩切石が用いられている。

12次以内襲撃以後に造営された遺構としては、掘立柱回廊の東柱列に重複する南北方向の掘立柱網（SA248）と、内襲正殿の南に並んで検出した建物（SB447）がある。網列（柱間各3間）は今回12間分、前回までの調査と合せて17間を確認したが、南限は未確認で

ある。正殿の南の建物は9間×4間東西棟(柱間各3間)孤立柱建物で、その規模は前回の調査で判明、していたが、今回扉網柱の南2.8間に柱通りのせうら小柱穴列を捜出した。この建物と柱列は柱通りがせうらい、同一時期の造営によるものと認められる。

このほかにも平塚宮以前の遺構として、神明拜台境(8X2.14)の底用砂面削り遺構を捜出した。

遺構は以上のようであるが、遺物は少量で、これまでの調査と同程度の量が少量出土した。

平塚宮の沖2次内裏棟に孤立柱回廊にかこまれ内裏中肥帯が、平塚宮の裏とよく似ていることは、これまでの調査でも明らかである。正殿(SB450)は平塚宮の辰辰殿・正殿東側の遺物(SB440)は、その内裏殿の遺物にあたるものと考えられるが、今回新たに発見した9間×2間も、また平塚宮の辰辰殿にあたるものとみることができよう。

(2) 沖2次調査

この遺構は沖2次内裏の東北角で、沖2次調査肥帯の東方にあたる。遺構については、記述の都合上、東半部(6AAB-u, 6AAD-c.の北西)と西半部(6AAO-f, H, I, K, V 肥帯)に分けて報告する。

(1) 東半部

東半部で捜出した主な遺構は、建物1棟、礎石一面、柱穴1基、溝2条、土盛2、炉跡2基などである。これらの遺構には、少なくとも4棟にわたる造営が認められる。建物は6AAO-D 肥帯北側の小礎石を用いた1棟を除くほかは、すべて孤立柱のものであった。なお6AAB-u地区では、火山が俯いたため、全域に盛土を行ひ、その上にすべての遺構を造営している。

〔A期〕

6AAB-u 地区中央北部で、東春柱と南朝柱列を捜出した東西方向7間建物(柱間各3間)がある。u地区西北隅にある約7間の土盛もこの期に属し、これらから多数出土した木面の竹に天平19年銘を有するものがある。この土盛の埋没期を天平六年に求めることが

できる。

〔B期〕

この階期に最大規模の造営が行われ、建物3棟と築地一面が造営される。U地区東方で検出した南北方向の建物は、梁間2間、桁行6間以上の身舎の東西両面に廂が付き（柱間各3m）この地区で最も大きな規模のものである。この建物の南側に、この建物の東側柱列と東畷をせうえて建てられる東西方向7間の建物（柱間各2.6m）、前半部が未確認である。U地区西南部には、梁西方向3間、南北方向2間（柱間各2.4m）の東西棟建物が有り、この南側柱列と、前記の7間東西棟建物の北側柱列がせろう。U地区東端を南北に走る築地は、基礎地形として整地層を約50cm掘りさげ、この上に黄褐色粘土層土を積みあげたもので、東端は後で破壊されているが、基礎地形等の現在幅は北端で約6m残っている。この上には東西約2mの幅隔に、南北方向2列の掘立柱小穴があり、これは築地構築の際に造営に要した柱穴であろう。

〔C期〕

U地区西北部で南北6間以上、東西2間（柱間各3m）の南北棟建物を検出した。この建物はA期の土壌埋土の上に建てられている。

〔D期〕

U地区中央北寄りに、東西方向6間、南北方向4間の東面棟建物がある。この建物は4間×2間（柱間各2.4m）の身舎の四面に廂がつく。

このほかにU地区東南部の5間×1間以上東西棟（柱間各2.4m）、中央部の北廂のつく5間×3間東面棟（柱間各2.4m）、西面部の2間以上×2間の南北棟（柱間各3m）、6AA0-C地区の5間×2間南北棟（柱間各2.4m）、6AA0-D地区3間×2間南北棟（柱間各2.2m）などの建物があるが造営期が明らかでない。また6AA0-C地区の東西方向の溝、6AA0-D地区北方の溝、6AA0-D地区中央部にある土竈についても造営期は不明である。この土竈から木炭が採出された。

6AAB-II 地区東部にある井戸は出土遺物から見て鹿純期を平城上皇の時期に推定される。なお、地区中央部北端で、平面が長方形の炉址を基を檢出した。この炉はA期以前に作られている。また平城宮造営以前の遺構として、6AAO-D 地区南部で、市庭古墳東周溝東岸の一部を檢出した。

以上の4面にわたる造営期のうち、B期はそれに用いられたと認められる野良から、オ2次内裏造営期と期を同じくするものと考えられる。南北方向の築地は、現地形から判断して、オ2次内裏外郭を越する東面築地になるものとみられ、その内に造営された殿舎は、内裏内郭との位置関係から見て、平好宮の「華芳坊」にあたる一部に属するものと考えられる。従ってA期はオ2次内裏造営以前、C・D期はそれ以後の造営ということになる。

(ロ) 西半部

今回新正に檢出された主な遺構は、建物1棟、孤立柱列1、井戸1などである。

調査地域の南端には、オ2次内裏内郭北側を限る西側の北側柱列と、それに伴う雨落溝とが東西に走っている。これらは南半部までで調査されたもの、東の延長部である。桁行柱間は約4m、凝灰岩の礎石を持つものである。これに伴う雨落溝は凝灰岩砌石作りである。これも前半段を築いたもの、延長である。その35m北に一茶の溝が調査地域の中央以西にある。幅約1m、深さ70cmほどあり中央部で北方に急曲し、約20mほど北で、さらに北東に曲り、6AAO 地区東半部に達している。この溝は延長部で狭くなる。これらの溝の北側は橋下川の築地痕跡が東西にあり、これも前半段築地した築地の東延長部である。この築地の北側には、東半部に中う溝ほどの石敷きがある。

孤立柱列礎のうち東西棟6棟、南北棟5棟がある。これらの遺物は少なくともB期に分けられる。

【I期】

I期に属するものは、調査地域の中央部にある7間以上×5間・

4面配付の東面棟⁽⁶⁾である。柱間は桁行・梁行ともに3間の等間で、この地区で最大の規模のものである。この北側にある5間×3間の東西棟⁽⁶⁾は、次の2期に属するものより柱間係において古いから、あるいはこの期に属するかも知れない。これは身舎2間で、南北端を揃ち、柱間桁行は桁行2.8m、梁行1.5mである。

〔2期〕

1期の遺物の東よりに位置する5間×2間の南北棟⁽⁷⁾がこの期に属する。柱間は桁行・梁行とも2.4m

〔3期〕

この期に属するものは11間×2間の南北棟⁽⁸⁾で柱間は桁行2.95m、梁行3mである。

〔4期〕

もつとも西側に近い5間×2間の東西棟⁽⁹⁾で、柱間は桁行2.4m、梁行2.7mである。梁5間は7尺

〔6期〕

この期に属するものは調査地域の東よりに位置する2棟である。その一は7間×2間の南北棟⁽⁹⁾で柱間は桁行・梁行とも2.4mである。北から5間目に間柱があり、この間柱初りまでは西側に3間離れて柱穴が並ぶ。柱穴の大きさからみて、西端とするには疑向もある。他の一は4間×3間の東西棟⁽¹⁰⁾、南端付で柱間は梁間、桁行とも2.85mである。この両棟に共通することは建物の前庭方向がやや西にみ出ていることである。南北にはこの期にも或いはこの期に属するものかも知れない。この期の建物の柱間は2.4mであることから考えて、前期のさがるものであり最も新しいものであらう。

前期の不明のものは3棟ある。一は5間×2間の東西棟⁽³⁾で、柱間は梁行、桁行ともに2.5mである。他は3間×2間⁽⁴⁾の南北棟で柱間はこれも桁行、梁間とも2.4mである。他の一は3間⁽¹¹⁾×2間の南北棟⁽¹¹⁾である。柱間は桁行が頭の方で3.0m、北の方で4.5mと梁間ではなく梁間は2.4mである。現在2間ほどしか分りないが、北端部さらに1間のびるものと思われる。

この地蔵の南半分は市庭古墳の前方部をとりまく中約40mの周縁の地蔵であり、埋め立て、蓋地されたものである。

(3) 遺物

遺物は柱穴・土埴・埴・井戸・盛土などから発見され、木簡を始めとし、多量の瓦、土器・陶類・漆・織物・木の各製品・若干の自然遺物がある。

木簡

木簡は6AA0区の土埴と6AAB区の土埴のニヶ所から発見された。まだ調査途中であるが、すでに細片を合せて150葉以上が発見された。その若干を列示する。

6AA0・土埴

「左衛士前」

「□□□□
建部益人」

「□多紀国□」

「^(ツツ)
他田床足」

「刑部石次郎□」

6AAB区土埴

表「□□後校系貳佰陸拾伍圓 天保六年

裏「□中務少正池田定隆」

「若狭国速敷郡^島語調三斗」

「^國國^國國^國谷豆^國語調^國部^國□」

「^國國^國國^國領^國茂^國部^國□^國御^國ヤ^國主^國□□□」

「^國國^國國^國和^國具^國御^國伊^國祐^國順」

表「^國國^國國^國板^國野^國郡^國井^國隈^國野^國□」

裏「^國國^國國^國主^國御^國部^國馬^國長^國主^國國^國部^國□」

「^國國^國國^國鹿^國島^國郡^國植^國麻^國御^國大^國發」

「^(天保十八年)
^國國^國國^國耳^國同^國九^國月^國料^國御^國賢^國守^國波^國加^國楚^國割^國大^國口」

「天保十九年七月廿三日」

木簡は6AAB土埴出土のものでは特に天保の御決の海運や関係の

もの、また6AAG上段出土のものは瓦製土所や人名記載のものが著しい。

瓦

全域から多量の瓦類、甍が採集されている。丸・平瓦、軒瓦・軒瓦瓦のほか亀瓦も発見した。軒瓦・軒瓦瓦では、中二次内製製造の採用した一組(6311-6664)が最も多く、また小型の軒瓦・軒瓦瓦(6313-6685)が、6AAB区東端の築地の雨落溝から多く出土し築地にこれが用いられたことを示している。

なお6AAG区の木簡出土土城の上層から縹細瓦化した平瓦を1枚発見した。

土器

土師器、須恵器が主で、墨書銘を有する土器もある。種類も平城宮出土土器としては一級明器、杯、皿、壺、甕、釵などが大部分である。6AAG区は遺構の性格上、土器は少ないが、土師の6AAG区出土土城、6AAB区、築地西側の池山上色灰層で出土するものに類似した。6AAB区木簡出土の土城から検出された土器は、平城の木簡より次第未年頃のものと見て土器の編年的研究の上で、その発見は大きいものがある。6AAB区の東の井戸からは墨書銘のあるものが発見された。

「陸太郎 炊せ取不俣 若取名管五斗」

この墨書は土師器杯の外面と底にあり土器様式上平城前期のものである。また数枚の陶製円鏡が検出されているが、うちに鳥羽の鏡と八花鏡があった。

その他に漆の厨の前片、むしろ断片などが発見され、木製品では入唐・造・田物産部、木炭、タキ木などが検出されている。

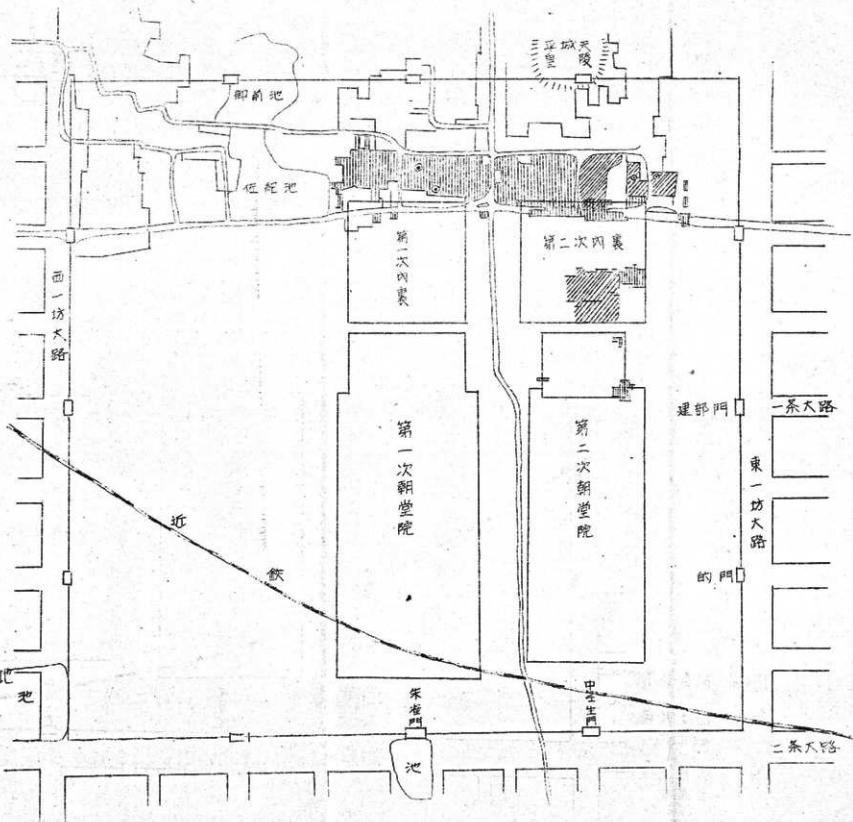
他自然遺物ではクルミ、花、栗、鼠の糞などがある。




(ア)

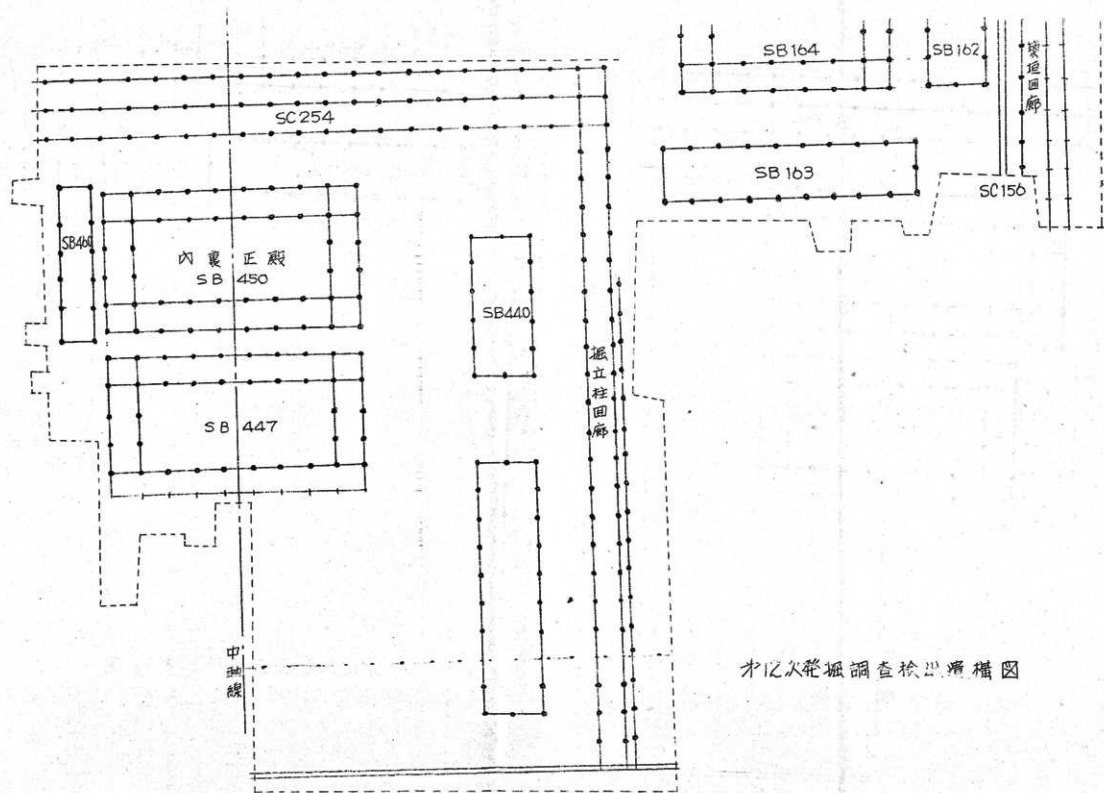
兼 [5期]

1期の遺物の間よりも密なる6向以上×3向の東⁽⁵⁾向きに分布する。南側付の遺物で、柱間は横行3川縦行2.55mである。遺物の類

1月ほどの前に雨降量がある。これは1~4期のどれとも切り合わないで前後関係は明らかでない。しかし雨降量と3期連物の関係から、3期以降のものと考えられる。

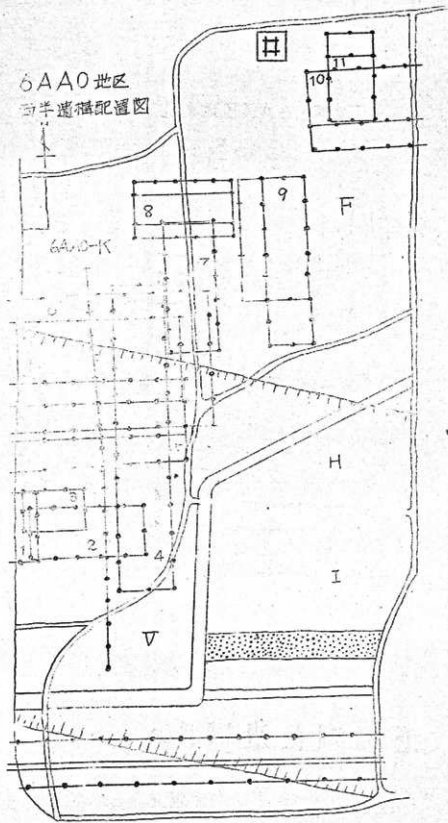


-  調查終了地
-  12-13次採取地域
-  木簡出土

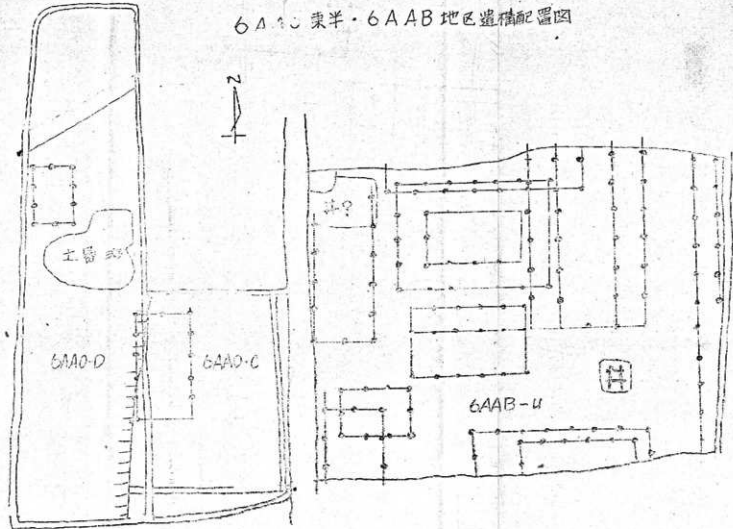


才乙次院振調查檢出遺構圖

6AA0 地区
前半遺構配置図



6AA0 後半・6AAB 地区遺構配置図



第13次発掘調査遺構配置図